

人間のない神

倉橋由美子

角 川 書 店

昭和36年4月20日 初版発行

書名 人間のない神

定価 300円

著作者 くら はし め み こ 倉橋由美子

印刷者 草刈親雄

製本者 宮田勝太郎

発行者 角川源義

発行所 かどかわしよてん 株式会社角川書店

東京都千代田区富士見町2

振替東京195208

落丁・乱丁本は交換します

目次

囚人

三

死んだ眼

五三

夏の終り

七九

人間のない神

一〇三

あとがき

二四三

四
入

ある暑い午後、Kは白い陽ざしをうけた清潔な路面でふいに数人の男にとりかこまれた。みんな土色の作業服を着ており、腕章を巻いていたが、その文字を読むまでもなく、Kは自分にたいする刑の執行がはじまったのを知った。それにしても一見うさんくさい連中であり、正式の執行吏かどうか疑わしいものだとおもいながら、陽を避けて街路樹のかげにはいるうとしたとき、うしろから無言のまま重たい棒がKの頭にうちおろされた。「やった！」と男たちは口から泡をとばしてわめいた。Kは、輪郭がかすみ暗く傾いていく視野のなかに、かれらが腕を振り熱狂して口をひきあけるのを見た。Kはたわいなくあおむけに倒れた。そしてぼくを撲殺するつもりだなおもいながら、息苦しさのあまり胸をかきむしり、ついでこれが断末魔だともいうふうに、両腿をわき腹につくほどひきあげ痙攣させた。そんな姿勢のためか、肛門と尿管が同時にゆるみ、とめどなくもれはじめた排泄物が股のあいだをよごすのがわかった。しかも打撃の結果頭蓋骨が陥没したらしく、その亀裂がなかからこみあげてくるものにおしひろ

げられ、もろい卵殻のような音をたてて割れめをひろげていくようだ。そしてそこからなまあたたかい脳漿のうしようが湧出しはじめていた。それは外氣にふれると妙にひやりとする。こんなさびしい気もちにおそわれたのははじめてだとKはおもった。しかしげんにKがおかれている事態の意味を正確に判断することは不可能に近かった。死ぬかもしれない、とKは考えてみた。むろんそんなことはばかっている。いまのところ、Kの存在については、それが執行吏たちの手にゆだねられ、処分の決着も知らされないままきわめて曖昧あいまいな状態におかれていると判断するはかなかった。かれは不安そうに眼をひらき、白く濁った眼球をころがしてまわりのようすをうかがおうとした。すると湿った指がまぶたにさわり、らんぼうにそれを閉じさせた。「死に顔のわるいやつだ」とだれかがいった。Kはむっとして抗議のためにちゃんと眼をみひらこうとつとめたがむだだった。「ぼくをどうするつもりなんです？」とKはできるだけ穏やかにいつてみた。が、そのとき、作業員たちはざわめきをはじめた。「さあ、すぐ工場に運んで皮を剥はぐんだ」とだれかが横柄おうびな口調でいうのがきこえた。「皮を剥ぐんですか？」Kは感嘆してうわずった声をあげた。「ぼくの皮をですか？」

こんなふうにして刑の執行がはじまるとはKにはすこぶる意外なことだ。犯行以来Kはたび

かきなる召喚と警告にもかかわらず、灼けた石の広場、太陽と海、段丘に刻まれた墓碑のような街々をかけめぐって生きてきたが、いま下級執行吏による逮捕と同時に頭の裂れめから黄いろい恥を流しながら、かれの存在は刑罰のなかでしっかりと管理されることになったのだ。だが、どんな審理のみちすじをへて、どんな判決をくだしたというのか？　すべてはKの不存のうちにとりおこなわれたようにおもわれる。もちろんKは自分の犯行にたいしてなんらかの刑罰がくだされることを知っており、それを待っていたといつてよい。だがこの侮蔑的（みべつてき）でいい加減なとりあつかいは、はたして正式の刑の執行とみなされるだろうか？　そのとき、Kのまわりにむらがった群衆のなかから「臭いわね、この囚人」という声がきこえた。「ずっとまえから腐りはじめていたんだ、こいつは」「生きたままで……」そんなこともありうるだろうとKは恥ずかしさの血の色に酔いながらおもった。

「さあ、あんたがた、どいてくださいよ。うろうろしてると公務執行妨害とみなされますぜ」
 そういうと作業服の男が長い棒をハンマー投げのようにふりまわして群衆を追いはらった。このあいだに責任者らしい眼鏡をかけた男はカードに必要な事項を記入した。Kは好奇心をおぼえたので、起きあがってなにが記入されているのかのぞきこもうとしたが、ふりむいた男はすば

やく脚をのばして鋏びさうの打たれた靴底でKの顔を踏みにじった。この酷薄で断固とした態度は、おそらく、Kが完全に受刑者の身分におちこみ一切の勝手な行動を禁じられていることをしめすものだと考えられた。Kは痛さのあまり涙で眼球を膨脹させ、昆虫のような泣き声を放った。だが作業服の男たちは腕を組み、きこえないふりをしていた。トラックがきた。一人がKの足首をつかみ、土嚢をあつかうようにしてひきずった。そのとき、うちくだかれた頭骨からはみだした大脳のラオコンがほどけて、石の舗道をひきずられるのがわかった。それは土埃にまみれ、ひりひりするかんじだった。

Kは工場に送られる途中もわめきつづけていた。それはほとんど哄笑のようにきこえるほどだった。だがかれらがKを無視していたのは、下級官吏にみられる融通のきかない忠実さや鈍重さからであつたらしい。砂塵を浴びながらKは疲れはててついに短い眠りにおちた。気がつくと、Kはある暗い地下工場のようなところにいた。機械工場というより洗濯工場が大規模な調理場に似ている。よく光るボイラーやパイプ、それに調理台や水槽などが、動物の内臓よりも複雑に配置されて建物のなかをみたしていた。それらのあいだで忙しそうにたち働いている作業員が目についた。かれらは白いマスクで顔の半分以上を隠し、手に各種の器具をもって作

業に熱中していた。Kはまた元気をとりもどしてどなつてみたが、ここではKの抗議はもはや大して重要な意味をもたないし、ことに熱心な作業員にたいしてはなんの力をもつものでもないことはあきらかだった。鼻がむずがゆいのに気づいた。左右の鼻腔のあいだをしきる壁を針金が貫通していたためだ。針金には金属製の番号札が結びつけてあった。整理のためらしいがこの工場の規模の大きさは、Kの番号が三桁^{けた}であることからもうかがわれた。たぶんここは国立刑務所の付属機関であるかもしれない……

「こう暑くてはかありませんな」とKのうえでだれかがいった。「ほんとですな」とKも相槌^{うづ}をうったが、相手はどうやらKに話しかけたのではなかったようだ。Kは赤くなり、少女がするように肩をすばめ身をよじった。恥ずかしさでうるんだ眼のうえに白熱した光の球があった。あたりは作業場特有の活気にみちて騒然としていたが、そのなかからふいに鋭く吹き鳴らされる笛の音がKのうえにおちてきた。

「なにをぐずぐずしてるんだ、こら」それは現場監督らしい男の脂っこいバスだった。Kはぎょっとして下肢をひきつらせた。「おまえたちのところはちつともはかどつてない。いいか、標準能率は五十分に一単位なんだぞ。第六班なんか一単位を三十五分で処理するという新記録

をたてている」どうやら叱られているのは自分ではないとおもい、Kはそつと薄目をあけてようすをうかがった。顔の下半分をしまりなくゆるめて笑いながら、眼では怒り、若い作業員の頭を撫なでている監督がみえた。だがじつは撫でているのではなく、部下の頭を残忍な力でこすりつけているのだった。ひとしきり摩擦を加えると、抜毛のついた拳をみやって監督はにっこりした。おもわずつりこまれてKもにっこり笑いかけたとき、監督は笑顔のまま怒声を放った。

「はやく皮を剥げ、まぬけ野郎！」

「そんなに焦ったって、あなた、準備もあることだろうし……」とKはとりなすようにいったが、この発言は簡単に無視されてしまった。すぐさま、革のマスクをかけた顔がKをとりまいた。そして上膊部をとめ金つきの革製プロテクターでしめつけた腕が、冷たい消毒薬に濡れた指をひろげてヒドラのようにKの全身にとりついてきた。Kがことのなりゆきをみまもりたといとおもって、首をもたげたとたんに、二又になった義手のような金属器械が人間ばなれのした早業でKの首を突きたおし、ベッドにおさえつけた。それは女の補助作業員のしわざだった。無言のうちに上気した顔たちがKのうえをとびかい、メスやピンセットが鋭い音をたてた。い

つのまにかKの頭髮や陰毛はすっかり剃られていたが、これはKには無益な作業ではないかとおもわれた。それから家畜用の断種バサミを握った男が左手をKの股のあいだにさしこみ、辜丸がんをぐいとしぼりあげると、無造作に切断してしまった。ほとんどそれと同時に別の作業員が陰茎を根もとから切りとった。大したことではない、べつに痛くもない、とおもいながらKはおとなしく血を流していた。かれは苦痛よりも恥に氣を奪われていた。つぎの瞬間、氣魄きはくのこもった低い掛声とともに、Kの首は真鍮の大針で刺しとおされた。老練者らしい作業員がのしかかり、二度えぐってから巧みな要領で針をベッドにまでつきとおしてKを固定することに成功した。まるで魚のように料理するつもりだ、とKはおもい、うなり声をあげた。年とった作業員は満足そうに笑って桃いろの口腔をのぞかせた。鼻の頭に粟粒状の汗をかいているのがKにはとくべつ印象的だった。Kもほっとすると同時にこの作業員の手ぎわには感動を禁じえないほどだった。だが相手はゆるめていた頬を急にひきしめた。「はいとこやろうぜ」とかれは太い声でいい、そのことばがおわらないうちにKはふたたび非常に多くの手や刃物が自分のからだにとりついてくるのをかんじた。からだのあらゆる末端には釘がうちこまれた。そのあいだに股からヘソをへて首まで、鋭利なメスが一直線に走って切れめをいれた。そのV字形の

切り口から空気がしみるようにおもわれた。皮の切り口に多くの指がかかった。「じつに厚い皮だ！」とだれかが叫んだ。Kもそのことにはこれまで気がつかなかったが、しかしたしかに厚い皮にちがいない。合唱がはじまった。Kは狼狽^{ろうばい}し、自分も口を動かしていつしよに歌う真似をした。力づよい合唱とともにKは自分の皮が左右上下に引き剥がされていくのをかんじた。皮は次第に裏返しになっていく。裏側はひどく汚れているらしく不潔な臭気がした。できればここを十分洗っておくべきだったとおもったがもうあとのまつりだった。外套の数倍もあるとおもわれる厚い皮は、すっかり剥ぎひろげられて、いまは手首、足首と背中のところまでKに接しているだけだった。「裏返せ」と老練な作業員がいった。「腹ばいにさせる。そうだ。動かないように、首と脚をおさえつける」そしてKは背中から最後の皮が剥ぎとられる音をきいた。作業員は喚声をあげた。いちばん若い作業員が剥ぎとったばかりのKの皮を着て、両腿をひきあげ、踊った。かれらは皮を奪いあい、めいめい一度ずつそれを身にまといてみないと気がすまなかった。

「すみませんが」とKはたまりかねていった。「すんだらはやくそれを返してくれませんか。寒くてしょうがないんです」

すると一瞬、かれらはしずまった。Kは自分の意志表示がうけいれられたものとおもい、身をおこそうとした。しかし老練な作業員がみるかげもなく貧弱になったKを指さした。たちまち作業員たちはKに殺到し、狂ったような迅速さでKの内臓をつかみだし掻きだしてそこいらに投げちらした。Kはひどく気がめいるおもいだった。こうして最後の希望も切りきざまれ、あとにかれらがつめこんだものは絶望のような白い岩塩だけだ。そこで作業は完了したようすだった。あるいは終業の時刻がきて、作業はいったん中断されたにすぎなかったのかもしれない。いずれにしてもこんな中途半端で無意味な刑の執行をうけいれることはできないだろうとKはおもった。まるでKの存在はK自身から剝げかけたまま放置されたみたいだ……

ふかい不安からくる嘔吐に酔ってKはなかなば眠っているような気もちでいた。とつぜん太い関節をもった手があらあらしくKをつかみ、剃ぎとられたとき裏返しになったままのKの皮でKを無造作に巻いた。それから紐をかけてかたく縛ったがまるで荷物でも包装するような工合だった。自分の皮であるにもかかわらずひどく着心地がわるかったのは、皮が裏返しになっており体毛の密生した皮の表側が傷口にじかにさわるためかもしれない。Kはたまりかねたので自分でもおもいがけないほどの大声をだしてそのことを注意した。するとKをとりあつかって

いた二人の男は——かれらはみたところ臨時傭いの人夫風の男だった——愚鈍な声で笑い、そのままKを小荷物運搬用の一輪車に積みこんだ。かれらは肉食獣のうなり声に似た非常に低い声をだしていた。よくきいてみると鼻唄だった。Kをどこへ運ぼうというのか？ 死体焼却炉へ？ しかしそれは無意味なことだとKはおもった。死刑の判決がくだっていたとすれば、かれらはKにたいしていままでこんな愚劣でむだなふるまいにおよびはしなかっただろう。それにKは死体ではない。かれは人夫にむかってこのことを断言し、不用意な処置をとらないようにと注意した。だが人夫はそれにはこたえずに、「やけに臭せえな」といいあつた。「そのはずですよ」とKはすかさず注意した。「ぼくの皮を裏返しにしたままですからね。血だらけの方を表にしてぼくをくるるんだ」

「黙れ」と人夫はどなった。「いくらおれたちにとりいろうとしたってだめだぜ。話には乗ってやらねえからな」

「でもぼくをどこへつれていくんです？」

「場所はちゃんと知ってるんだ。だがそこへいつてあなたがどんなめにあうかは教わっちゃいねえ」人夫の一人はそういうとエレベーターの戸をあけた。Kと人夫がのり、戸を密閉する